

2021/01/24

ヨハネの福音書 講解メッセージ③④

『イエスは涙を流された』(1) ヨハネ 11:1-40

「エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエス様はその都のために泣いて、言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。」(ルカ 19:41-42 新共同訳)

イエス様は、私たちに神の福音が見えないと言って涙を流されました。聖書の中でイエス様が涙されたことは二回あり、もう一つは死んだラザロがよみがえらされる直前です。いずれも、私たちが「人間的な標準」、すなわち「理性」の「納得」を優先し、「神の言葉」を素直に信じようとしなないことによるものです。神は、人が「理性」の「まやかし」に翻弄され、「神の言葉」を素直に信じられないとき、涙されるのです。

ラザロがよみがえる場面を通して、私たちは何を注意すべきなのか、何を目指すべきなのかを学びましょう。先週の話をおさらいしながら、話を前に進めます。

■弟子たちとのやり取り

「さて、ある人が病気にかかっていた。ラザロといって、マリヤとその姉妹マルタとの村の出で、ベタニヤの人であった。このマリヤは、主に香油を塗り、髪の毛でその足をぬぐったマリヤであって、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。そこで姉妹たちは、イエスのところに使いを送って、言った。「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。そのようなわけで、イエスは、ラザロが病んでいることを聞かれたときも、そのおられた所になお二日とどまられた。」(ヨハネ 11:1-6)

マルタとマリヤから使いが来た時、イエス様はラザロのもとには行きませんでした。その理由をイエス様は、「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです」と述べておられます。

「その後、イエスは、「もう一度ユダヤに行こう。」と弟子たちに言われた。弟子たちはイエスに言った。「先生。たった今ユダヤ人たちが、あなたを石打ちにしようとしていたのに、またそこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるでしょう。だれでも、昼間歩けば、つまりくことはありません。この世の

光を見ているからです。」しかし、夜歩けばつまづきます。光がその人のうちにはないからです。」イエスは、このように話され、それから、弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠っています。しかし、わたしは彼を眠りからさましに行くのです。」そこで弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、彼は助かるでしょう。」しかし、イエスは、ラザロの死のことを言われたのである。だが、彼らは眠った状態のことを言われたものと思った。そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。「ラザロは死んだのです。わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいきます。さあ、彼のところへ行きましょう。」そこで、デドモと呼ばれるトマスが、弟子の仲間に行った。「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか。」

(ヨハネ 11:7-16)

イエス様はラザロの死を待って出発なさいました。弟子たちは「わたしは彼を眠りからさましに行くのです」というイエス様の言葉の意味が分からなかったので、「眠っているのなら、彼は助かるでしょう」と言うと、イエス様は、はっきり「ラザロは死んだのです」と言われました。

つまり、「わたしは彼を眠りからさましに行く」というのは、「わたしは彼をよみがえらせに行く」という意味です。しかし、この話を「人間的な標準」で理解した弟子たちは、「死んだ者がよみがえるなどあり得ない」と思いました。そこで、自分たちの「理性」が「納得」できるようにイエス様の言葉を解釈し、トマスは「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか」と仲間に行ったのです。ラザロがいるベタニヤに行くということは、イエス様がユダヤ人たちに殺される危険があったため、彼にとっては、そう言うのが精一杯だったのです。

もし弟子たちがイエス様の言葉を素直に信じたなら、「ラザロがよみがえる奇跡が見られるんですね。何と素晴らしいことでしょう」と言うでしょう。しかし、弟子たちは、「神の言葉」を「信仰」で受け取ろうとはせず、「理性」という「人間的な標準」で知ろうとしました。そのため、イエス様と弟子たちの会話は成立しなくなり、イエス様は、これ以上弟子たちに語っても仕方がないと判断し、彼らには何も語らずにベタニヤに向かわれました。

■マルタとのやり取り

さて、イエス様が来られていることを聞いたマルタは、イエス様を迎えに行き、イエス様に会うなり、「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに」(ヨハネ 11:21) とつぶやきました。しかし続けて、「今でも私は知っております。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります」(ヨハネ 11:22) と言って、イエス様に対する信仰を告白したのです。そこで、イエス様は単刀直入に、「あなたの兄弟はよみがえります」(ヨハネ 11:23) と言われたのですが、マルタはイエス様の言葉を素直に信

じようとはせず、「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております」（ヨハネ 11:24）と解釈しました。

もちろん、イエス様がここで言われたのは、「終わりの日」の話ではありません。しかし、人の「理性」が支配されている「因果法則」、つまり「自然法則の原理」では、死人が目の前でよみがえるなどということはありません。そこでマルタは、それは「終わりの日」に起きることだと解釈したのです。当時の人は、やがて世界の歴史が終わり、それから「神の国」が実現すると考えていたので、マルタも歴史が終わる日を「終わりの日」と呼び、その時に、ラザロがよみがえることは信じています、と言ったのです。

かつてイエス様は、「しかし、私が神の指で悪霊を追い出しているのなら、神の国はあなたがたのところに来たのだ」（ルカ 11:20 聖書協会共同訳）と教え、さらに、「さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエス様は答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」」（ルカ 17:20-21）と教えられました。つまり、「神の国」は、世界の歴史が終焉を迎える時に実現するわけではありません。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」（ヨハネ 5:24）

イエス様は、ご自分を信じ、神を信じている者は、決して死ぬことがないと教えられました。

この「信じる者は」も「永遠のいのちを持ち」も、原文では現在形であって、「信じている者は、永遠のいのちを持っている」が正確な訳です。そして、「死からいのちに移っている」は完了形であって、「死からいのちに移った」が正確な意味です。つまり、イエス様を信じていたラザロは、「神の国」で生きているのであり、死んでなどいませんでした。そこでイエス様は、ラザロの体を再び生きる体とし、そこに彼を支えている「魂」を呼び戻そうとされたのです。

しかし、マルタは、こうした一連のイエス様の教えを信じることはできませんでした。そこで、「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております」（ヨハネ 11:27）という言い方をし、奇跡を先送りにしたのです。そうすることで、「理性」を「納得」させようとしたのでした。しかしイエス様は、再度こう述べられました。

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」（ヨハネ 11:25-26）

イエス様は、「わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」と断言し、ラザロがよみがえることを再度告げられました。ここに、「また、…」とありますが、この場合は「すなわち」と訳するのが適当です。イエス様は、「すなわち、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません」と語り、神を信じていたラザロは死んでなどいないことを強調されたのです。イエス様が「このことを信じますか」とマルタに迫ると、マルタはこう答えました。

「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。」(ヨハネ 11:27)

イエス様はマルタに、「ご自分が神の子キリストであることを信じますか」と聞いたのではありません。ついに、イエス様とマルタの会話も、先ほどの弟子たちとの会話と同じように成立しなくなりました。マルタも弟子たちと同じように、「神の言葉」を素直に信じようとはせず、「神の言葉」を「人間的な標準」で知ろうとし、「理性」が「納得」することを優先させたからです。そこでイエス様は、これ以上マルタに語っても仕方がないと判断し、姉妹のマリヤを呼びに行かせました。

■マリヤとのやり取り

「マリヤはそれを聞くと、すぐ立ち上がって、イエスのところに行った。さてイエスは、まだ村にはいないで、マルタが出迎えた場所におられた。マリヤとともに家にいて、彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリヤが急いで立ち上がって出て行くのを見て、マリヤが墓に泣きに行くのだらうと思い、彼女について行った。マリヤは、イエスのおられた所に来て、お目にかかると、その足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」(ヨハネ 11:29-32)

この話の導入で、マリヤについてだけ、「このマリヤは、主に香油を塗り、髪の毛でその足をぬぐったマリヤであって、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである」(ヨハネ 11:2)と、説明が加えられています。ルカの福音書では、香油を塗った女性が誰なのかは明らかにされていませんが、その女性について、イエス様は次のように語っておられます。

「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさと分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」(ルカ 7:47 新共同訳)

つまり、香油を塗るという行為をしたラザロの姉マリヤは、多くの罪が赦された者であり、そのことで誰よりも熱心にイエス様を愛する者であり、誰よりもイエス様を信頼する者であ

ったことが分かります。それゆえ、かつてイエス様がマルタとマリヤの家に招待された際も、給仕に一生懸命なマルタに対して、マリヤは熱心に「神の言葉」を聞き入っていたのです。

「彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。」(ルカ 10:39)

聖書は、わざわざマリヤにだけ説明を加えることで、イエス様がマリヤを呼びに行かせた理由を明らかにしています。それは、マリヤであれば、イエス様が「あなたの兄弟はよみがえります」という言葉を素直に信じてくれるのではないかと、イエス様が思われたということです。

しかし、マリヤはひれ伏し、「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」と、言いました。これは、「主がいてくださらなかったから、兄弟は死んでしまった」ということであって、イエス様に対するつぶやき以外の何ものでもありません。姉のマルタも、最初は同様のつぶやきをしましたが、そのあと、イエス様に対する信仰を精一杯告白しました。しかし、ここでのマリヤは、今さら何をしても無理ですとつぶやいて、泣くだけです。これまで熱心にイエス様の言葉に耳を傾けてきたマリヤでしたが、いざ大きな困難に直面すると、「理性」が「納得」することを優先してしまい、「神の言葉」を素直に信じることができませんでした。

「そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、言われた。「彼をどこに置きましたか。」彼らはイエスに言った。「主よ。来てご覧ください。」イエスは涙を流された。そこで、ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。主はどんなに彼を愛しておられたことか。」しかし、「盲人の目をあけたこの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかったのか。」と言う者もいた。そこでイエスは、またも心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓はほら穴であって、石がそこに立てかけてあった。」
(ヨハネ 11:33-38)

マリヤだけでなく、そこにいた誰もが、ただ泣くだけです。かつてイエス様は彼らに、「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです」(ヨハネ 5:24)と教え、信じる者は死なないことを教えました。誰もそのことを信じられなかったのです。その様子をご覧になったイエス様は、もうマリヤには何も話されませんでした。ただ霊の憤りを覚え、心に動揺を感じられ、ついに涙を流されたのです。

それを見た人々は、「ご覧なさい。主はどんなに彼を愛しておられたことか」と言ったり、「盲人の目をあけたこの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかったのか」と、つぶやいたりしたので、イエス様はまたしても、霊の憤りを覚えられました。

■なぜイエス様は涙を流されたのか

イエス様が涙を流された理由は、弟子たちや姉妹たちが、「理性」が「納得」することを優先し、「神の言葉」を素直に信じようとはしなかったからです。イエス様は、彼らの「不信仰」に対し、涙されたのです。

「イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだ人の姉妹マルタは言った。「主よ。もう臭くなっておりましょう。四日になりますから。」イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」（ヨハネ 11:39-40）

このやり取りからも、イエス様が涙を流された理由は、彼らの「不信仰」に対してであったことは疑う余地もありません。なぜ「不信仰」に対して涙されるのか、それは人を本気で愛しておられるからです。イエス様は、「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます」（ヨハネ 10:11）と言い、ご自分の「いのち」を差し出してもかまわないほど、本気で愛しておられたので、人の「不信仰」に対して、涙されたのです。すなわち、この「不信仰」こそが、「バベルの塔」の本質なのです。（次週に続く）